

平成 30～31 (2018～2019) 年度上越教育大学研究プロジェクト (特別研究)
「大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究」報告書
【学内限り・内部資料】

大学院教員養成課程における 社会系教科専門性育成の在り方に関する 実証的基礎研究

2020年3月

上越教育大学大学院・学校教育研究科

下里 俊行 (研究代表)・菅原 至 (研究副代表)

目次

研究概要	下里 俊行・菅原 至	2
大学院教員養成課程における社会系教科の専門性育成の方向性 ——価値の次元の扱いを中心に——	下里 俊行	4
教育大学における「宗教」教育の内容と実践 ——上越教育大学で「宗教」をどう教えるか——	塚田 穂高	11
パワフル・ナレッジ(powerful knowledge)論の生成と展開に関する教科教育学的覚書 ——地理教育からの書誌学的アプローチ——	志村 喬	19
裁判の事例から学ぶ学校安全に関する教師の専門性	蜂須賀 洋一	28
教職大学院の学修と教育実践の間 ——A教員の教育観の変容に着目して——	菅原 至	35
外国籍児童の学習支援活動の自己エスノグラフィに向けたノート	堀 健志	44
資料 シンポジウム『社会科教科内容構成学の探求』の意味と今後の教員養成』の記録		50
『社会科教科内容構成学の探求』について ——小学校社会科の改善・充実と求められる教員の資質の視点から——	富永浩文	50
学び続ける教員としての資質・能力 ——『社会科教科内容構成学の探求』と関わって——	仙田健一	51
『社会科教科内容構成学の探求』について ——時間系社会科の視点から——	任田富美	52
子どもと教師が主体的になるための社会科教科内容構成学の構築に向けて ——教育現場が求める教師の姿——	松村謙一	53

研究の概要

下里 俊行(研究代表者)・菅原 至(研究副代表者)

本研究は、平成 30～31(2018～2019)年度上越教育大学研究プロジェクト(特別研究)として申請し採択された「大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究」プロジェクトの成果をまとめた報告書(学内限り・内部資料)である。具体的な研究成果(後掲個別論文)に先立ち、以下に本研究プロジェクトの概要を述べる。

I. 本上越教育大学研究プロジェクトの区分・名称・概要

1) 区分: 特別研究, 研究期間: 平成 30～31(2018～2019)年度

2) 名称: 大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究

3) 研究プロジェクトの概要(目的・特色・意義・期待される成果等)

本研究は、大学院での教員養成(再研修を含む)において、教科教育実践者としての専門性育成の在り方を、本学大学院教育の社会系教育分野の実績から実証的に検討することを目的とする。

これまで本学の大学院では、教員養成の在り方を理論的・実践的に考究してきた。社会系教育分野としては、教科教育の側面から専門職学位課程所属教員と修士課程所属教員の共同による大学研究プロジェクト研究(教育実践研究・特別研究, 平成 27～28 年度, 研究代表者 志村 喬)を遂行し、その成果として『教科内容・教科教育・教育実践を横断したPCK研究による教師の専門職的力量的の構造解明』(全 46 頁, 2017 年)を刊行した。これと並行して、教科専門の側面からは修士課程社会系教育実践コースの全教員参加による科学研究費補助金研究(基盤研究(B))(平成 26～29 年度, 研究代表者 松田慎也)を遂行し、その成果として『社会科教科内容構成学の探求』(風間書房, 2018 年)を刊行した。本研究プロジェクトは、これらの先行研究の成果を発展させた点にその最大の特色がある。具体的には、先の大学研究プロジェクト(特別研究)で得られた教科教育的研究成果と科研費研究で得られた教科専門的成果とを理論的に統合し、これまでの大学院修了者の実態からそれを臨時的・実証的に検討する点に意義がある。

本研究は、修士課程と専門職学位課程の教員の協働による教科専門領域の国内外の先導的な研究プロジェクトであり、大学改革で新しい形での教員養成が全国で模索される中、高い教科教育実践力を持った教員養成はどのように在るべきかを社会科に限らず、教科汎用的な理論として提起・発信することが期待される。これは、全国的なスケールでは、現代的教育課題の解明・解決に資するものであり、地域スケールでは、学校現場の課題(上越市教育委員会の大局的な課題「学力向上」等)に資する成果であり、本学の目的に合致するものである。

II. 研究組織

研究代表者 下里 俊行 上越教育大学大学院・学校教育研究科(修士課程)

研究副代表 菅原 至 上越教育大学大学院・学校教育研究科(専門職学位課程)

研究分担者 堀 健志 上越教育大学大学院・学校教育研究科(専門職学位課程)

蜂須賀洋一 上越教育大学大学院・学校教育研究科(専門職学位課程)

志村 喬 上越教育大学大学院・学校教育研究科(修士課程)

橋本 暁子 上越教育大学大学院・学校教育研究科(修士課程)

塚田 穂高 上越教育大学大学院・学校教育研究科(修士課程)

小松 敦 上越市立八千浦中学校校長・新潟県社会科教育研究会会長

近藤 克彦 修士課程・大学院生・妙高市立新井南小学校

II. 予算

大学プロジェクト研究経費(2年間):総額 850,000 円

内訳 平成 30 年度 425,000 円 平成 31 年度 425,000 円

III. 本研究プロジェクトの概要と成果

研究1年目の平成 30 年度に、本学大学院の修了者自身が、大学院での学修成果・意義を、現在どのように評価しているかの情報・資料収集・検討のために、全国で活躍する修了生 6 人を招聘したシンポジウムを開催した。

このシンポジウムは、本プロジェクト研究の理論基礎をなす松田慎也監修『社会科教科内容構成学の探求』(風間書房, 2018 年)の公刊を機に、『社会科教科内容構成学の探求』の意味と今後の教員養成」と題したもので、2018 年 10 月 7 日 上越教育大学社会科教育学会第 33 回研究大会に合わせて開催されたものである。シンポジウムのプログラムは、以下の通りである。

第一部【パネルディスカッション】

『社会科教科内容構成学の探求』への各専門的見地からの提言

パネリスト

富永 浩文氏(糸魚川市立木浦小学校 校長)

任田 富美氏(石川県教育委員会 課長補佐)

仙田 健一氏(南魚沼市立八海中学校 教諭)

松村 謙一氏(三重大学教育学部附属中学校 教諭)

第二部【コメント・総合討論】

コメント・社会科教科内容構成学と教員養成

コメンテーター

梅野 正信氏(上越教育大学 理事・副学長)

小栗 英樹氏(国立教育政策研究所教育課程調査官・文部科学省教科調査官)

以上のように、本研究経費により招聘されたシンポジウスト・コメンテーターは、全国の学校・教育委員会・文部科学省・大学で活躍する修士課程社会系コース修了生である。

公刊された書籍は教科教育領域における先端的研究成果であるが、それを全国水準の臨床的視座から議論したことで、現代的教科教育課題の解明・解決や教育活動の基礎となる先導的な研究として成果を定位することができた。また、シンポジウムには、新潟県社会科教育研究会会長はじめ地域の多くの社会科教員が参加し、地域の小・中学校教員及び学校現場が抱えている諸課題とニーズに対し社会科教科内容構成学や大学院修士課程学修が有する意義を共有することができた。さらに、それら成果をふまえ、松田慎也を代表者とした科学研究費補助金(基盤研究(B))「教科教育と教科専門を架橋した社会科教科内容構成学の臨床と国際比較に基づく確立」(2019-2022)を申請することができた(不採択)。

このシンポジウム内容は、上越教育大学社会科教育学会誌『上越社会研究』第 34 号(2019 年 10 月)の特集記事としてまとめられ、全国へ発信された。この特集記事は、本報告書にも転載した。

研究2年目の平成 31 年度は、基本的に研究分担者による個別研究を実施し、2019 年 8 月に研究打ち合わせを行い、研究の方向性について意見交換を行った。さらに 2020 年 2 月に研究打ち合わせを行い、研究成果の共有と今後の課題について意見交換を行い、本報告書の編集・刊行準備作業を行った。

平成 30～31 (2018～2019)年度上越教育大学研究プロジェクト(特別研究)
「大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究」報告書
【学内限定・内部資料】

大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究

2020年3月

編集・発行

上越教育大学大学院・学校教育研究科

下里 俊行(研究代表)・菅原 至(研究副代表)

〒943-0835 新潟県上越市山屋敷町1番地

印刷

有限会社 深堀印刷所

〒942-0001 新潟県上越市中央2丁目9-14